

第6章 ||||

進学意識の差異(分化)構造

本章では、現代高校生の進学意識の差異・分化の様相を明らかにしていきたい。高校生の進学意識は、時代の風潮や若者文化の影響を受けて、さまざまな方向へ差異化・分化している。ここでは、高校生のいくつかの属性（性別、学校グループ、成績）に注目しながら、

高校生の進学意識の差異（分化）化の様子を考察したい（本章で使う数字は、全て不明を除いた数字を母数として算出した。不明を含めた数字については巻末の集計表参照のこと）。

1 高校間格差(学校グループ)による差異

アメリカの文化人類学者ローレンは、日本の高校を調査して、アメリカとの違いとして学力による格差構造をあげ、高校間格差を効率的な制度として高く評価している（トーマス・P・ローレン 友田泰正訳『日本の高校』サイマル出版会、1988年）。日本では、学校間格差が受験競争の産物としてマイナスに評価されるのが一般的である。この学校間格差（グループ）は、高校生活や生徒の進路意識の形成にどのように関連しているのだろうか。

ここでは、調査対象校を、高校入学時の学力や大学進路実績等によってABCの3つのグループに分けたものを使う。今回の調査対象校では、a、f、h、kの4校がAグループ

校（旧帝大の国立大学や有名私立大学への進学が多い超進学校）、c、e、g、i、jの5校がBグループ校（地元の国立大学に多く進学する進学校）、b、d、lの3校がCグループ校（高校卒業後の進路希望は多様）である。

① 第一志望の高校か

現在の高校が希望の学校かという回答は、A 70.8%、B 56.0%、C 25.7%（「どちらかといえば」まで含めると、A 93.7%、B 85.4%、C 67.9%）と、Aグループ校に多く、Cグループ校に少ない。Bグループ校はその中間である。このように学校グループにより大きな

差がある。生徒たちは少しでも偏差値の高い高校に挑戦するようにと親や中学校の進路指導でいわれ、ランクの高い高校を目指してきたのであろう。

② 高校生活の満足度

高校生活の満足度(「とても」+「わりと満足)を学校格差(グループ)別にみると、「授業」に満足(以下同じ) A 41.5% > B 32.1% > C 26.2%、「先生」 A 36.9% > B 34.6% > C 27.1%、「成績」 A 12.0% < B 12.1% < C 17.4%、「進路相談」 A 18.7% > B 17.0% > C 14.9%、「部活動」 A 45.9% < B 47.1% > C 32.2%、「友だち」 A 74.3% < B 77.5% < C 78.3%、「高校生活全般」 A 44.0% < B 46.1% > C 35.8%、「学校へ行くのが楽しみ」(とても+わりと) A 50.9% < B 51.2% > C 37.9%、「休み時間が楽しみ」(とても+わりと) A 59.9% < B 67.8% > C 65.5%、となっている。

これをみると、全体的には、学校の授業や先生への満足度は、ランクの上の高校(A)の生徒が高く、部活動は中位の高校(B)で高く、友だちや成績は下位の高校(C)で高くなっている。つまり上位の学校の生徒は学校の中心的文化(授業)に適合的で、下位の学校の生徒は学校の中核の活動(授業)より友人の方へ楽しみを見いだしている。

③ 高校卒業後の進路希望

高校卒業後の進路希望を聞くと、「4年制大学」全体では、A 93.5%、B 87.8%、C 54.9%、「難関4年制大学」はA 67.5%、B 31.7%、C 16.8%と、進学アスピレーションに大きな学校グループ差があることがわかる。これは、卒業生の進路実績からくるチャーター(Charter)効果(卒業生の進路実績から自分の進路の可能性を予測する)によるところが大きいのであろう。

④ 「難関といわれる大学」への合格可能性

これについても、学校グループ差がある。

「入れる」(きっと+なんとか)という回答は、「このままいったら入れる」(A 7.7%、B 3.7%、C 4.4%)は差がないが、「一生懸命勉強したら入れる」がA 64.1%、B 46.3%、C 45.6%とAとB、Cの間に差があり、「一浪してねばったら入れる」(A 71.9%、B 55.1%、C 54.0%)にもAとB、Cの間に学校グループ差が大きくある。

Aグループ校の生徒は、がんばれば自分には難関大学に入れる可能性があるかと確信している。B、Cグループ校の生徒はそのような自信を持ってないでいる。

このように、学校グループは、生徒の受験アスピレーションを加熱したり冷却したりして高校生に自分の能力や将来の可能性に関して定義づけをする働きがある。

将来の仕事についても同様である(たとえば、「医師」になるのが「とても無理」と考えているのは、A 56.3%、B 66.6%、C 72.5%と学校グループ差が顕著である)。

⑤ 大学や短大選択の基準

大学や短大選択の基準に、学校グループ差があるのであろうか。Aグループ校の生徒が重視しているのは、「カリキュラム」(「とても大事」以下同じ59.3%)、「研究施設や設備」(43.3%)であり、逆にCグループの高校の生徒が重視しているのは、「取得できる資格」(「とても大事」以下同じ59.5%)、「就職率がよい」(48.7%)、「授業料が安い」(46.8%)、「推薦で入学できる」(35.1%)、「キャンパスがきれい」(33.8%)、「大学難易度との適合」(32.7%)、「受験科目」(30.5%)等である。Bグループ校は、その中間に位置する。このように、上位校(A)は大学の伝統的な価値(学問)を重視しているのに対して、下位校(C)の生徒は、就職と入学しやすさと大学生活の楽しさを重視している。現在大学のユニバーサル化が進む中で、後者の生徒の要求を入れる方向で、大学は変わりつつあるといえてよいであろう。

⑥ 大学や短大への進学理由

大学や短大への進学理由を高校間格差別にみてみよう。Aグループ校では「やりたい勉強ができる」(A 41.7%、B 38.2%、C 32.1%)、「専門的知識が学べる」(A 45.1%、B 42.9%、C 39.0%)が多く、Cグループ校では、「就職に有利」(C 37.0%、B 29.8%、A 33.2%)、「自由な時間がほしい」(C 24.0%、B 19.4%、A 19.3%)といった回答が多くなっている。

⑦ 浪人するか

第一志望の大学や短大に入れなかった場合にどうするかで、高校間格差がある。Aグループ校は「浪人する」(A 34.7%、B 16.5%、C 9.9%)が多く、Bグループ校の生徒は

「合格した第二、第三希望の大学・短大に入学する」(B 63.3%、C 55.7%、A 55.7%)が多く、Cグループ校は「専修・専門学校に入学する」(C 15.1%、B 5.7%、A 5.3%)が相対的に多い。このように、Aグループ校の生徒は、高い野心を持ち浪人をしてでも第一志望の大学に入ろうとし、Bグループ校の生徒はほどほどの野心の持ち主で受かった大学に入ればいいと考え、Cグループ校では別に大学に行くことにはこだわらない、専門学校や就職でもいいという生徒も現れている。

このように、通っている学校のレベルによって、生徒の進路意識は大きく分化している。この進路意識の分化・差異の現実を踏まえ、進路指導がなされる必要があるだろう。

2 学校グループ・成績による分化

受験競争が日本の教育の諸悪の根源だという考えは、依然根強い。受験競争が、高校生活にどのような影響を及ぼしているのかを今回のデータで確かめてみよう。大学受験への囚われが、さまざまな高校生活や価値観へのゆがみを形成しているのではないかという見方の検証である。

受験競争に一番コミットしている生徒を、調査対象者から取り出す方法はいくつかある。第一は、高校受験競争に勝ち抜き超進学校に入り、なおかつ成績も上位で難関大学に合格する可能性の高い生徒(8.4%)に注目する方法。第二は難関大学(「入るのが難しい4年制大学」)を目指している生徒(40.3%)に注目する方法。ここでは、少数の第一の生徒に注目しよう。

今回のデータでAグループ校に在籍し成績が上位(現在の成績が「上」ないし「中の上」)の生徒は、全体で358名ほどいる(男子225名、女子130名、性別不明3名)。このAグループ校に属し学業成績も優秀な生徒は、今の日本の受験社会の中で、どのような位置にいるの

か、つまりどのような学歴意識の持ち主でどのような生活を送っているのか。過酷な受験勉強を強いられ、ゆがんだ意識や人格の持ち主なのか。それとも……。それをデータから検討してみたい。受験優等生グループの特質を明らかにするためには、比較のグループが必要である。そこでBグループ校で成績が中位の生徒(493名;男子211名、女子282名)とCグループ校で成績が下位の生徒(201名;男子119名、女子81名、性別不明1名)のデータも取り出して比較してみよう。主な結果を示したのが表6-1である。

表6-1の結果から、現代の受験競争の真っ只中にあるAグループ校で成績上位の生徒は親の学歴が高く、難関大学を目指し、学校の授業にまじめに取り組み、授業への満足度が高く、部活動や友人への満足度も高く、学校生活全体が楽しいと感じている。自我像も明るい。受験のためにいろいろなことを犠牲にして暗い生活を送っているわけではない。大学選択の理由も、就職や遊びのためというのではなく、専門の勉強のためという明確な問

表6 - 1 生徒の学校グループ・成績による分化

(%)

	Aランク・成績上位 (358名)	Bランク・成績中位 (493名)	Cランク・成績下位 (201名)
第一志望の高校に入学(確実に)	73.1	57.8	24.5
学校へ行くのが楽しい(とても+わりと)	56.0	53.0	27.4
授業に満足(とても+わりと)	67.6	37.2	18.4
部活動に満足(とても+わりと)	47.3	48.5	26.3
友だちに満足(とても+わりと)	76.1	80.5	70.1
高校生活全般に満足(とても+わりと)	54.1	48.9	24.4
授業中内職やいねむり(とても)	14.8	9.9	22.5
努力型(とても+少し)	41.7	38.8	21.5
みんなから信頼されている(とても+少し)	36.0	25.1	24.0
友だちが多い(とても+少し)	42.5	43.5	51.5
通信添削利用中	30.5	23.6	5.1
4年制大学志望	97.8	90.8	43.7
難関4年制大学志望	85.4	27.8	11.6
第一志望に入れないとき、浪人する	37.5	15.5	10.1
一浪すれば難関大学に合格できる(きっと)	49.9	22.2	24.8
有名大学より希望する学部を選択	83.9	75.9	83.1
偏差値より希望する学部を選択	82.6	77.8	89.2
希望する学部より就職実績重視	39.9	31.0	46.5
大学の研究施設や設備重視(とても)	50.6	32.2	28.8
大学で取得できる資格重視(とても)	45.2	47.4	56.8
大学の受験科目重視(とても)	33.8	29.3	47.5
キャンパスのきれいさ重視(とても)	18.6	24.1	37.3
大学進学理由 勉強(とても)	53.5	38.0	27.6
専門知識(とても)	53.2	42.3	39.7
就職に有利(とても)	33.5	28.9	47.4
自由な時間(とても)	12.4	16.7	37.9
キャンパスライフを楽しむ(とても)	20.0	24.4	36.2
大学に入って;研究・ゼミ(ぜひしたい)	22.6	8.9	10.3
大学に入って;アルバイト(ぜひしたい)	56.3	67.1	76.3
将来の目標を持っている(とても+やや)	63.9	54.0	61.3
自分の部屋の掃除(いつも自分で)	36.0	45.1	55.6
父親(大学卒)	59.2	46.6	30.5
母親(大学・短大卒)	50.1	42.3	32.4

題意識を持っている。親に頼り自分の身の自立に欠けるという問題はあるが、自分の将来についてもしっかりと目標を持っている生徒たちである。

それに対して、Cグループ校の成績下位の生徒は、勉強に熱心に打ち込んでいるわけではない。部活動への参加も中途半端である。現在の高校が第一志望の学校でなかったせいもあるが（またそれを言い訳に使うこともあると思われる）学校生活全体があまり楽しくない。高校卒業後は入れる大学や短大、場合によっては専門学校や就職してもよいと考えている。大学に行くとしても、それは勉強のためというよりは、就職を有利にするためであったり、自由な時間にバイトをしたり遊んだりするためである。

このように、進学校に通い高校時代に勉強中心の生活を送ることは、決して高校の生活全体を暗いものにするのではなく、高い志や

明確な目標のもとに、生活を律していくのに役立っている。友人からの信頼も得ている。受験競争が日本の教育の諸悪の根源だという見方は、今回のデータでみる限り否定されたといつてよいであろう。

しかし、Cグループ校の成績下位の生徒の置かれた状況にも注意が払われなければならない。その生徒たちを勉強から逃避した怠惰な生徒だと決めつければ済む問題ではない。彼らは自分たちの不利な分野や基準で競争を強いられ低く評価され傷ついた自我を、同様に傷ついた仲間と連帯することで癒しているのかもしれない。彼らは受験競争の犠牲者でもある。この生徒たちは、4年制大学進学希望者は多くないが（4割）進学するときは大学名や偏差値より自分の学びたい分野を優先し、将来の職業のことを考える実学志向の生徒たちでもある。受験偏差値社会の超克はこのような生徒たちから生まれる可能性もある。

3 進学意識の男女差

なぜ、男子と女子で、4年制大学志望や難関大学志望で差が出るのか。成績、予備校・塾通い、浪人、志望学部、大学でやりたいこと、大学選択基準、学歴意識、職業観、ジェンダー観などから探っていく。

① 学業成績

男子と女子で学校での成績に関して差があるのだろうか。「中の上」以上（「上」+「中の上」）の高い成績の割合をみると、「小学校高学年の頃」；男子67.2%、女子67.5%、「中学校3年の頃」；男子73.7%、女子70.7%、「高校2年の現在」；男子24.9%、女子26.2%と、ほとんど男女で成績差はない。

② 予備校、通信添削

予備校や塾に行っている割合は、男子21.7%、女子18.1%と男子が多少多い。通信

添削を受けている割合は、男子17.9%、女子19.9%と女子が多少多い。このように、受験のために学校以外の機関を利用する割合に、男女差はない。

③ 浪人規範

第一志望の大学・短大に入れなかったとき、「浪人する」は、男子28.3%に対して女子14.9%と女子に少ない。「合格した第二、第三希望の大学・短大に入学する」は、男子48.7%に対して、女子65.5%と女子に多い。このように、女子には浪人はできないあるいはしたくないという気持ちが強くある。なぜ女子の浪人は、忌避されるのであろうか。女子には高い学歴は将来の結婚にかえて不利と考えているせいなのか、将来の職業に高い学歴は必要ないと考えているのか、理由はいろいろ考えられる。

④ 有名大学が希望の学部か

「大学の知名度」より「自分の希望する学部」を優先するという生徒は、男子79.5%に対して、女子88.0%と、女子に多い。また「高い偏差値」より「自分の希望する学部」を優先するという生徒は、男子83.2%に対して、女子89.8%と女子に多い。しかし、「就職実績」と「希望する学部」の二者択一では、就職実績を優先するのは男子(33.7%)より女子(37.3%)に多い。このように、女子は自分の好みを優先しつつ将来の職業のことを真剣に考えるという選択をしている。

⑤ 大学選択の基準

大学選択の基準(「とても」+「わりと」大事)は、男子は「有名な大学」(男子41.0%、女子30.3%)という名を取り、女子は「学びたいカリキュラム」(女子95.4%、男子86.9%)「資格が取れる」(女子90.1%、男子80.2%)「伝統や校風」(女子48.7%、男子31.8%)「自宅から通学できる」(女子47.1%、男子34.1%)など、自分の好みと女子特有の選択の傾向がみられる。

⑥ 大学でやりたいこと

大学への進学理由も、男子に比べ女子の方が積極的に学ぶ姿勢がみられる。女子に多いのは、「やりたい勉強ができる」(「とてもそう」の割合；女子45.6%、男子31.9%)「専門的な知識が学べる」(女子49.7%、男子37.1%)「資格を取る」(女子35.9%、男子21.3%)「将来の仕事につなげたい」(女子64.6%、男子49.8%)などである。それに対して、男子は、「自由な時間がほしい」(男子24.4%、女子16.1%)と問題意識が低い。

⑦ 学歴社会観

「有名大学に行けば、高い収入を得ることができる」(「とても」+「まあ」そう思う割合；男子55.3%、女子42.9%)「有名大学に行けば、自分の希望する職業につける可能性が高くなる」(同；男子74.8%、女子61.7%)

「どの大学を出たかで人生が決まってしまう」(同；男子49.4%、女子45.7%)と、女子より男子の方が、学歴社会意識が強い。男子は、有名大学へ行けば高い収入、希望する職業、望みの人生が得られる可能性が高いと信じている。女子の方がそうでない自分たちの現実をしっかりと認識している。

⑧ 職業アスピレーション

今の日本の職業社会は男性優位の社会であり、女性はなかなか希望する職業につけないし、女性向きでない職業も多いと、多くの女子生徒はアスピレーションを冷却している様子が次の数字からわかる。

つまり「次の仕事につくのはがんばっても無理」(「とても無理」の割合)は、「国会議員」(男子64.1% < 女子76.4%)、「医師」(男子60.8% < 女子68.5%)、「大会社の社長」(男子52.3% < 女子69.3%)、「大学教授」(男子48.1% < 女子63.5%)、「弁護士」(男子48.8% < 女子57.4%)、「コンピュータ技師」(男子30.4% < 女子48.4%)、「役所の部長」(男子31.1% < 女子40.3%)、「新聞記者」(男子28.1% > 女子24.2%)と、「新聞記者」を除き、ここにあがっているすべての職業に女子が多い。

⑨ 性別役割分業意識

女性の仕事に関する意識や性別役割分業意識には男女差が大きいことが指摘されている。今回対象の高校生でも、結婚して女性が仕事を持つことに関して、「ずっと仕事を持ち続ける」は、男子22.4% < 女子34.5%と女子に多く、「結婚したら家庭に入る」(男子15.9% > 女子9.3%)「子どもが生まれるまで働く」(男子28.8% > 女子16.8%)が男子に多い。しかし、将来結婚してからの家事の分担に関しては、男女平等というわけではないが、男女で意見がほぼ一致している。たとえば、「夕食の買い物」が妻の仕事だという意識を女子の57.7%、男子の53.4%が持っている。また「夕食作り」が妻の仕事だという意識が、

女子の69.3%、男子の68.1%が持っている。ジェンダー意識は、高校生の中で性差縮小の方向に向かっている。

以上より、4年制大学や難関大学への志望に関して、男子が多く女子が少ないという男女差がある理由の1つに浪人規範があることがわかる。今の学力では難関大学に入学できないと大部分の生徒が思っている。しかし、浪人してがんばれば難関大学にも受かるだろうと考えている者は男女とも多い。しかし、男子は浪人してがんばるべきだが、女子が浪人してガリガリ勉強するのはいいことではな

いという考え方が一般的である。女子の浪人は将来の就職にも結婚にも不利に働く、ほどほどの大学に入り「かわいく」生きた方が有利という判断が働いている。この女子の浪人忌避の規範の存在が、浪人しないと難関大学には入れないという高校教育や入試の仕組みとあいまって、女子の低い4年制大学進学率や難関大学への進学率の低さを作り出しているといつてよいであろう。しかし18歳人口の減少の中で、4年制大学への現役入学率が上がれば男女差は縮小し、4年制大学や難関大学に進学する女子も増加するであろう。

4 考察

高校生を含めた青少年の意識や行動が大きく変わりつつある、教育内容の削減や大学入試の多様化で大学生はじめ生徒の学力が落ちている、ポストモダンの時代の高校生は受験を深刻なものとは考えず、ゲーム感覚でやり過ごしている……等々、現代の高校生の進学意識に関連することは、さまざまに語られている。

今回の我々の「高校生の進学意識」調査は、全国の進学校の生徒（全国12の公立高校、2年生、4,266名）を対象に進学意識を中心に、高校生活や大学受験、大学への期待、将来像などについてたずねている。

全体的な印象は、昔ながらの普通の高校生が多く存在するということである。大学受験を1年後に控えながら、受験勉強が普段の生活を圧迫し高校生活を暗くしている様子はいかがかえない。「学校へ行くのが楽しみだ」と「思わない」高校生は2割強と少なく、8割近くの生徒は何らかの楽しみを学校に見いだしている。受験のことが気になって仕方がない生徒は2割と少ない。塾や予備校に行っていない生徒は8割にも及ぶ。「有名大学」や「偏差値の高い」大学より、「自分の希望する

学部」のある大学に進学したいとする者が、8割以上いる。そして、1年先には、センター試験を受けて大学に入ろうとする者が7割以上いて（国立志望が多いと思われる）、今文部省が定員の5割までも認められた推薦入学で大学に入ろうとする者は1割強である。

大都市だけで若者や高校生の生態や意識をみていると、嘆わしく思うことも少なくないが、全国的には、昔と変わらない高校生活が営まれていることをデータは語っている。しかし、高校生の中にも、差異化・分化が進行して、画一的には語れない現実もある。

以上みてきたように、高校間格差（グループ）成績、性差によって高校生の進学意識が差異化・分化している。ここで考察した以外にもさまざまな要因によって、高校生の進学意識が差異化・分化していることが考えられる。たとえば、親の学歴（高学歴の親の子どもの方が4年制大学志望や難関大学志望が高い、職業アスピレーションが高いなど）、地域別（東日本と西日本、都市と農村の進学意識の違い）、入学した高校が第一志望の高校かどうかによる違い（第二志望の高校に入りやる気をなくす場合、逆に成績がよく自信

をつけ難関大学を目指す場合があるなど、専攻別の大学選択・学部選択理由の違い（理系は勉強志向で、社会科学系は遊び志向など）が考えられる。いずれにしる、高校生の差異・分化の実態に対応した進路指導が求められているのが現代である。

分散と集中と概念で、今後の方向を述べておきたい。分散と集中は、相矛盾する作用であるが、ある時期まで広く分散し、ある時期から凝縮して集中すれば、安定した美しい形になる。それは高校生の生活や受験勉強についてもいえるであろう。ある時期までは、交友、部活動、趣味の活動にと活動範囲を広げつつ、ある時期から受験勉強に集中する。それが高校生活の1つの理想的な形であろう。現実には、必ずしもそのような形にならないが、頭の中にそのようなイメージを持っておきたい。それは、中学時代にある程度経験し培われたものでもある。中3の夏休み前まで部活動に打ち込み、その後は部活動を引退して受験勉強に打ち込む。同じように高2までは部活動や趣味に打ち込み、高3になったら受験に集中する。このような理想的パターンを、今回調査対象になった進学校の生徒たちであ

れば送れるであろう。

もちろんそのような考え方には疑問もあるであろう。現代の経済不況、年功序列・学歴社会の衰退の中で大学へ行くこと自体意味があるのか。暗記中心の受験勉強は苦痛であり将来に役立つとは思えない。受験があるため思いきり、読書もスポーツも交友もできない。現代の社会には勉強以外に有益なものは多々ある。人格を歪める受験勉強に「集中」するなど、愚の骨頂である。

そのような意見の正当性も多少認めつつ、現代の日本の豊かな社会において、若者に与えられた試練＝通過儀礼として、大学受験しか残されていないのではないかと考えられる。少なくとも、今回の調査対象になった進学校の生徒にとって、高校生のある時期から受験勉強に集中することは、意義のあることであろう。今大学入試も改革され、暗記一辺倒でない問題や入試方法がさまざまに工夫されている。大学生の学力低下が問題視されている中で、受験の意味をもう一度考えるべき時であろう。今回のデータがその助けになることを願っている。